

——第33回記念！今年も華やかに開催しました——

「サッチモ祭」(TOKYO NEW ORLEANS JAZZ FESTIVAL)

お馴染みのバンドは健在！新たに参加のヤングバンドも大熱演

涼やかにカラリと晴れ渡り、爽やかな秋の日ざしに恵まれた9月29日(日)、秋の開催に移って2回目の「第33回サッチモ祭」(TOKYO NEW ORLEANS JAZZ FESTIVAL)が、

例年通り東京・恵比寿ガーデンプレイスのサッポロビール(株)「エビスビール記念館」で開催された。

一時、今年の開催が危ぶまれてはいたが、サッポロビールはもとより、駐日アメリカ大使館の後援など関係各方面のご努力で今回もつつがなく実施！例年同様、大いなる盛り上げをみせた。特に今年は、若いミュージシャン中心の新参加バンドも加わり、“デキシー健在”を

アピール、サッチモ祭に新しいページを加えた。外山喜雄・恵子夫妻も、常連の年輩ファンもお元気。まだまだいきまっせー！

(小泉良夫)

新入生が目白押しの早稲田ニューオリ 女子も多数！50人が応援に駆けつける

若いミュージシャンといえば例年、サッチモ祭を陰で支えてくれている早稲田大学ニューオルリンズジャズクラブ(以下早稲田ニューオリ)。今年は例年以上に新入生の入部があったそうで、この日午前9時半の会場設営集合時間には、そのフレッシュマンを中心に50人を超えるメンバーが集まった。お陰でスタッフに着てもらおう黄色いTシャツは品切れ、在庫ゼロ。女子



が圧倒的に多かったというのも嬉しい限り！前夜の会場設営についてこの朝、プログラムに

会報やらアンケート

用紙、チラシなどの挟み込み、入り口での配布もスムーズに進められた。ありがとう！この集合時間より前に、すでに9時前から女性客が1人、入り口に一番乗りというのにも驚かされた。

午前11時の開場と同時にステージ前の“特等席”が埋まってしまったのは例年通り。会場後、開演前までステージ横のプロジェクターには、ニューオリンズのWWLテレビ局の人気キャスターで、昨年来日し、しっかりと被災地取材してくれた、エリック・ポールセンさんが日本レイ・アームストロング協会(ワンダフルワールド・ジャズ・ファンデーション=WJF)の活動を30分近くにお

たって解説、放映してくれた特集番組だ。

日米の被災地支援パレードで開幕 恵子さんら司会トリオは今年も健在

正午開演。日米被災地支援のパレードが会場を回り「セカンドライン」で幕を開ける(写真上中央)。例年通り司会は、山口義憲(WJF 会報「ワンダフルワールド通信」編集長)、飯塚さち子、外山恵子のMCトリオ(同上)は健在。演奏の1番手は若さ溢れる早稲田ニューオリ(同上の下段)。毎年メ

ンバーが入れ替わって若返っていくのが早稲田ニューオリの見所、聴き所。次いで例年お馴染みの「ナッチェス・ジャズバンド」、浅草のHUBに出演するなど活発に活動中。



明治大学軽音楽クラブのメンバーを中心に結成されたOBバンド「ジャミング・ホットセブン」は今回嬉しい初登場。早稲田ニューオリ出身OB中心の「ドラムカーズ」(前頁の写真下)。トランペットの皆川晴樹さんは、ご夫婦で「サッチモの旅」にも参加していただいたことがあり、会場で“同窓生”との交歓も…。お孫さんも生まれたんですって。ピアノの大野かおりさんは和服で好演。そして、1部の締めは「ザ・サーフサイド・ストンプ」。慶応義塾大学デキシーランド、ジャズ・クラブと湘南のミュージシャンによる粋なバンド。休憩時間には、2回目の支援パレードが会場を巡回する。

**例年支えてくれたあの顔この顔…
新登場の若いパワーも炸裂した！**

第2部は「ドクター・デキシーセインツ」で幕開け。東京医科歯科大学のまさにドクター中心。すっかりおなじみのメンバーが顔をそろえる。斑尾、新宿、台湾…ジャズフェスを駆け回っているそうです。ついで工学院大学中心メンバーの「デキシー・ダンディーズ」。今年がバンド結成50年というのは凄い！ 次ぎの「ニューオリンズ・ノーティーズ」(写真下の左上)もお馴染みで、何とこちらも来年結成50周年を迎えるそうだ。トロンボーンの横田昭夫さんは、早稲田ニューオリ出身でいつもWJFの会計監査を無償でやって下さっているオーナー税理士。ステージの横では、東京、横浜を中心にスイングジャズダンス楽しんでいるというグループ数組が、バンド演奏に合わせて軽快にステップを踏む。男性一人が両手に女性をそれぞれともなつての華麗なダンスもお見事だった。

次の「ハロバンド」(写真左上の中央)は初出演の若手バンド。浅草ジャズコンテストで銀賞を受賞したとびっきりフレッ

シユなバンド。おなじみの「セカンドライナーズ」がこれに続き、2部の支援パレードに入る。

3部は「バンジュー・ストーンパース」(同下の上段)。バンジョー



ー9人、それにウォッシュボードと子ども可愛い女の子が笠を持って



加わってくれたのが、とても印象的(同左下)だった。毎年お馴染みの「ハightタイム・ローラーズ」が続き、そして「大丸リュニオン・ジャズメン」。このバンドの

コレット奏者、肥後崎英二さん(同下の下段)なしには、この「サッチモ祭」なんて実現できませんでした。まさに初回、東京駅・大丸デパート屋上ビアガーデンでの開催、生みの親。難病を克服して今年も大熱演でした。そして「古川奈都子ソウルフード・カフェ」。ニューオリ



ンズで活躍している古川



んはもとより、トランペットの中村好江さん(同左の下段)のパ



フォーマンスは、この日のハ



イライトのひとつで

もありました。サッチモ祭に若いパワーが炸裂するのは大歓迎、また来年が楽しみです。「デキシー・ショーケース」

(前頁の右上段)は、大ベテランの下間哲さん(tp)の熱演が光り。それに5人組のコーラスグループ Shoofies(同右中央)がハモって、演奏にステキな花を添える。

セインツやら会場を悩殺した美女集団 水森亜土とローズマリー・ダンサーズ

しんがりはもちろん「外山喜雄とデキシーセインツ」(写真下)。演奏に先立ってこの会場を提供して下さっているここ、

エビスビール記念館の嶋田一夫館長(同下)がステージで挨拶。33回目

の開催を祝福してくれて、こんな素晴らしいエールを送ってくれました。「エビスビールとジャズはとてもよく似ています。それは人を笑顔にしてく

れることです」と。そう、みんなエビス顔でしたよ。「サッポロのサッチモ」はしっかり守られてきました。ステージ脇のテイステイングサロンでは、各種エビスビールを求めて、正午の開演早々から行列ができるほどの賑わいだった。

セインツの演奏には、超美女ダンサー3人を加えた「水森亜土&ローズマリー・ダンサーズ」(写真2段目)が加わった。それも大胆に美脚を“大展開”したものですから、最前列にいなくても口をあめぐり…いやはや、そのセクシーさと魅力をたっぷり堪能さ

せていただきました。

セインツは、「ウエストエンド・ブルース」で聴かせ、サッチモのスカット誕生秘話「ヒービー・ジービーズ」で笑いを誘う。締めは「聖者の行進」。アンコールに呼んで「この素晴らしい世界」。正午開演、8時前終演…延々8時間。今年も例年以上に素晴らしいサッチモ祭だった。

「スイング・ジャーナル」誌を引き継いだ「Jazz JAPAN」

誌が、外山喜雄さんの特別寄稿『我が心のルイ・アームストロング』などを特集した“アーリー・ジャズを聴こう”の第38号を会場で販売したが、持ち込まれていた30部は(当然のことながら)終演までに完売。デキシーの根強い人気を目の当たりにさせた。

ここ「エビスビ

ール記念館」での開催に尽力して下さいった岩間辰志さん(元サッポロビール社長)の言葉ではないが、早稲田ニューオリの若い力が、今年も引き継がれ、また将来に向かって受け継がれていくように、アーリー・ジャズもまた若い力に受け継がれて行くに違いない。

この日、会場を3回にわたってパレードした支援パレード(写真左)と募金箱へのご寄付の総額は、22万2638円！ 来年もまた開催できるよう、みなさま、引き続きご支援ください。

主催：日本ルイ・アームストロング協会
協賛：エビスビール記念館
(有)ノラミュージック
後援：アメリカ大使館
協力：サッポロビール株式会社
ポッカサッポロフード&ビバレッジ株式会社

